

矢作川の流域における祭礼と服装について の調査 (第3報)

西 尾 の 大 名 行 列

栃原きみえ・斎藤一枝・坂倉園江
菊山弘子・済木敦子・戸田光子
菊地真理子・原 淑子

Investigation on the Festival and Costume in the Basin of River Yahagi (Part 3)

by

K. TOCHIHARA, K. SAITO, S. SAKAKURA,
H. KIKUYAMA, A. SAIKI, M. TODA,
M. KIKUCHI and T. HARA

緒 言

本学生活科学研究所では、1960年より矢作川流域における自然と文化に関する総合学術調査を行ってきたが、衣服部門を担当する筆者らは、引き続き1963年より1965年まで「矢作川流域における祭礼と服装」について調査を行なった。その結果を第1報では上流の“稻武のまつり”“足助地方の夜念仏とあやど踊り”“猿投の棒の手”について、第2報では、中流の岡崎市の“瀧山寺の鬼まつり”について、紀要第12号にそれぞれ報告した。

第3報では、下流の祭礼の中でも衣装や小道具で最も興味のある西尾の大名行列について報告することにした。

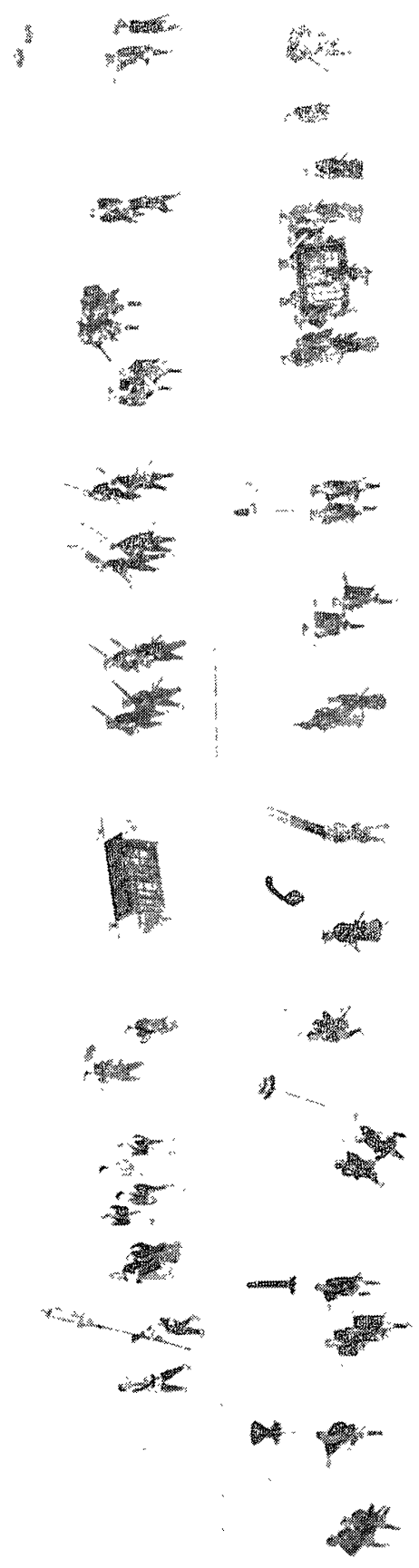
調 査 方 法

調査をするにあたり、先ず西尾市及び周辺地域の地勢、風土、交通、歴史などについて、関係図書により予備知識を得た。

祭礼については、祭礼当日に現地へ行き、祭事の実態を調査し、その模様を写真撮影した。さらに祭事、衣装、小道具については、祭礼関係者より数回にわたり、聞き取り調査を進め、なおカラー写真により、平面にした衣装の形態、色彩、柄を撮影した。また、衣装の形態の各部分については綿密に採寸をして平面図を作製し研究を進めた。

祭 事 と 衣 装

伊 文 神 社	愛知県西尾市伊文町
祭 神	すさのりのみこと 素盞鳴尊
祭 礼 日	7月15日
愛知県無形文化財指定	昭和32年7月5日



西尾市肴町の大名家行列の図

1. 由来と沿革

大名行列のはじまりは、江戸時代、大名が公式外出にさいして形式を整えた行列であるが、大名が参勤交代で領国と江戸の間を往来するときや、屋敷から江戸城に登城するときなどの公式の往来には、その家の格式に相応した人数、装備を必要とし、自然に行列ができたのである。

正徳4年（1714年）中御門天皇の御代は、武家政治がはなやかな時代で、士農工商の階級制度がきびしかったが、時の西尾城主土井利意は、祭礼時に限って町民に武士の衣装を用いることを許した。以来、伊文神社の祭礼に肴町の町人が大名行列を行なうようになり、盛んな頃は総勢81名に及んだということである。この行列は参勤交代時の大名行列を模倣したもので、明治維新に至るまで祭礼当日は衣装をつけ帯刀を許されて城内に練りこんだということである。（図1）

大名行列は大正末期まで続いたが、その後昭和9年（1934年）まで手踊りに変わり、昭和10年4月（1935年）名古屋汎太平洋博覧会に衣装が出品されてのち、同年7月と翌11年7月に行列が行なわれ、昭和12年（1937年）支那事変のために中止され、太平洋戦争後、昭和32年（1948年）に復活されて現在に至っている。（西尾市肴町 谷清氏談）

祭礼日は太陽暦頒布後旧6月15日、16日となり、のち新暦を用いたこともあったが梅雨期で雨天続きのため旧暦にもどった。しかし明治41年（1908年）幣帛供進史へいはくきようしんしがくるようになって以来新暦7月15日、16日に改定されたが、昭和37年（1962年）から7月15日のみとなった。

2. 祭 事

当日は肴町に設けられた本陣（たれ幕の中に武具などが陳列されている）に、祭事を行なう者が各自衣装を整えて集まり、勢ぞろいをしたのち列を組むことなく伊文神社に向う。伊文神社についた一行は境内で列を組み、行列の役柄ごとに、神前においてそれぞれの所作をひろう

し奉納する。その儀式が終わったあと、午前11時頃に伊文神社を出発し、八幡神社に向うのである。途中で、本陣の前でちょっと立ち止り手をあげて掛声をかけるが、これは殿様が駕籠に乗られたという合図である。(実際に乗るのではなく、仮想のもとに行なう所作である。)

行列の順序、ならびに役柄、人数は次の通りである。

- ◎看板持 人足1人
 - ◎看板付 町惣代2人
 - ◎駄荷二棹 人足8人
- (駄荷は最後に付随することもある)

- 先手(露払い) 2人
- 具足櫃 人足2人
- ◎徒 10人
- 鉄砲持 5人
- 弓持 5人
- 先箱 6人
- 見通し 6人
- 台笠 3人
- 立傘 3人
- 鳥毛 3人
- 長刀 1人
- 立弓 1人
- 御持 2人
- 二本槍 4人
- 御駕籠 陸尺4人
- 御近習 4人
- ◎茶坊主 1人
- 筥の箱 人足1人
- ◎飾馬 馬丁1人
- ◎付属品持 人足1人
- ◎野風呂二荷 人足2人
- ◎合羽籠二荷 人足2人
- 押え長持一荷 人足1人



図2 大名行列(具足櫃とその人足)

註 ◎印のものは現在行列から省かれている。

以上の役柄とは別に、子供達の行列(奴と御駕籠、但し陸尺は大人が担当)が一行の先頭に行くが、これは昔から続いている大名行列には関係がなく、はなやかさを添えるために、近年になって加えられたものである。このあとに“先手”(露払い)が長着の裾を端折り、脚半をつけ、ぶっさき羽織の明きから刀をのぞかせて、扇子を片手に「下にい、下にい」と、おさき払いよろしく列を先導する。その後には法被、股引、杉形管笠姿の人足が具足櫃をかついで続く。“鉄砲持”“弓持”は軽袷をはいている。奴姿の“先箱”“見通し”“台笠”“立傘”“鳥毛”が次に続く。暗い青色の法被の裾から浅黄色のふんどし(先箱のみは赤色のふんどし)をのぞかせ、白のしごきを、しめなわ状によって前にたらしした奴が「御駕籠のそばにはひげ

奴，毛槍をふりふりやっこらさのやっこらさ」
と昔ながらの身ぶり面白く見物人を楽しませながら進む姿は大名行列のはなともいえよう。(図3) “長刀”は木綿縞の軽衫を着用して続く。“立弓”(鉄砲持の衣装と同じ) “御持筒”(長刀の衣装と同じ) “二本槍”(奴の衣装と同じ)の後から御駕籠が行く。(図4) 駕籠をかつぐ人を“陸尺”，その着ている衣装のことを陸尺看板かんばんという。陸尺とは六尺りきしや豊かな体格の立派な人という意味とも，又，力者のなまった言葉であるともいわれている。



図3 大名行列(奴の所作)

御駕籠の側には二本差しの御近習がつくが、衣装はさすがに豪華なもので、浅黄色けんちゆうの絹ひとえ紬ながざの単衣長着ひろうとに黒天蓑しゆん絨を裾に縁どった襦はかせ珍ろの野袴，黒い細のぶっさき羽織に一文字笠といういでたちである。最後に“箕の箱” “押え長持”をかついだ人足が続き，この行列は午後1時頃八幡神社に到着する。しばらく休憩ののち，午後4時頃同神社を出発して行列はふたたび伊文神社へと向い午後8時頃に到着する。

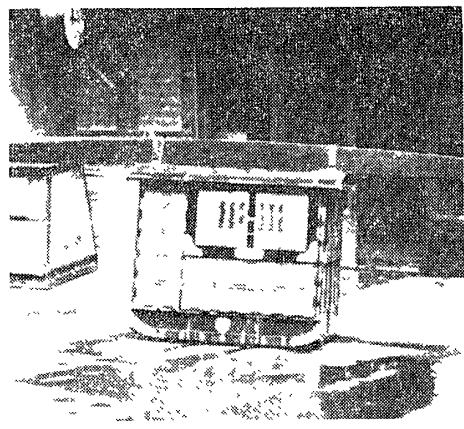


図4 大名行列(御駕籠)

大名行列の通るコースや時間については，年により多少の相違があり，また道中の所作は，市内の肴町やその他の目抜き通りで行なわれ，他は行列を組んで賑やかに行進する。

3. 衣装について

西尾の大名行列で各役が用いている現在の衣装は，江戸時代のものを模倣して作られたもので，衣装がいたんだ時に，大名行列の行事関係者によって補充されてきたということである。

紋付の衣装を作る場合には，補充を担当した家の紋をつけることか習慣になっている。

次に各役の衣装について，順を追って述べることにする。

先手(露払い)の衣装(図5)

先手は*長着の上に**ぶっさき羽織をはおり，***一文字笠をかぶり，脚半たびに黒足袋わらじわらじがけの着装である。

* 長 着

単衣仕立で，材質や色彩には制約がなく，各自の持衣装を用いている。着用する場合には長着の裾を端折って着る。

** ぶっさき羽織

ぶっさき羽織は，武家裂羽織からきた語ともいわれ，狩や外出に用いられ，小紋，縞の木綿，麻が多く用いられた。羽織の背縫いを裾まで縫わず，明きがあるのが特徴で，これは刀の鞘さやをのぞかせるためのものである。本祭礼のものは黒木綿で，明止りに金欄らんの亀甲ごつこう模様がアップリケされている。亀甲模様

は、^{かめ ずいしょう} 亀を瑞祥の動物とする支那からの伝来で、延命の瑞祥として^{つる} 鶴と共に平安時代から、模様や紋章として応用されてきた。

*** 一文字笠

江戸時代の初期には編笠が流行したが、中期以後編笠がすたれ、貴賤とも管笠が広く用いられ、武士は一文字形、平民は杉形、蝙蝠形、雷盆形などを用いた。一文字笠はほとんど傾斜のない円盤状のもので、横から見ると頂部が一直線に近い形になっているので、この名がつけられたということである。江戸時代には、藁製の折編笠と管製の平笠との2種があった。本祭礼の“先手”“御近習”が用いているものは、管製の一文字笠である。

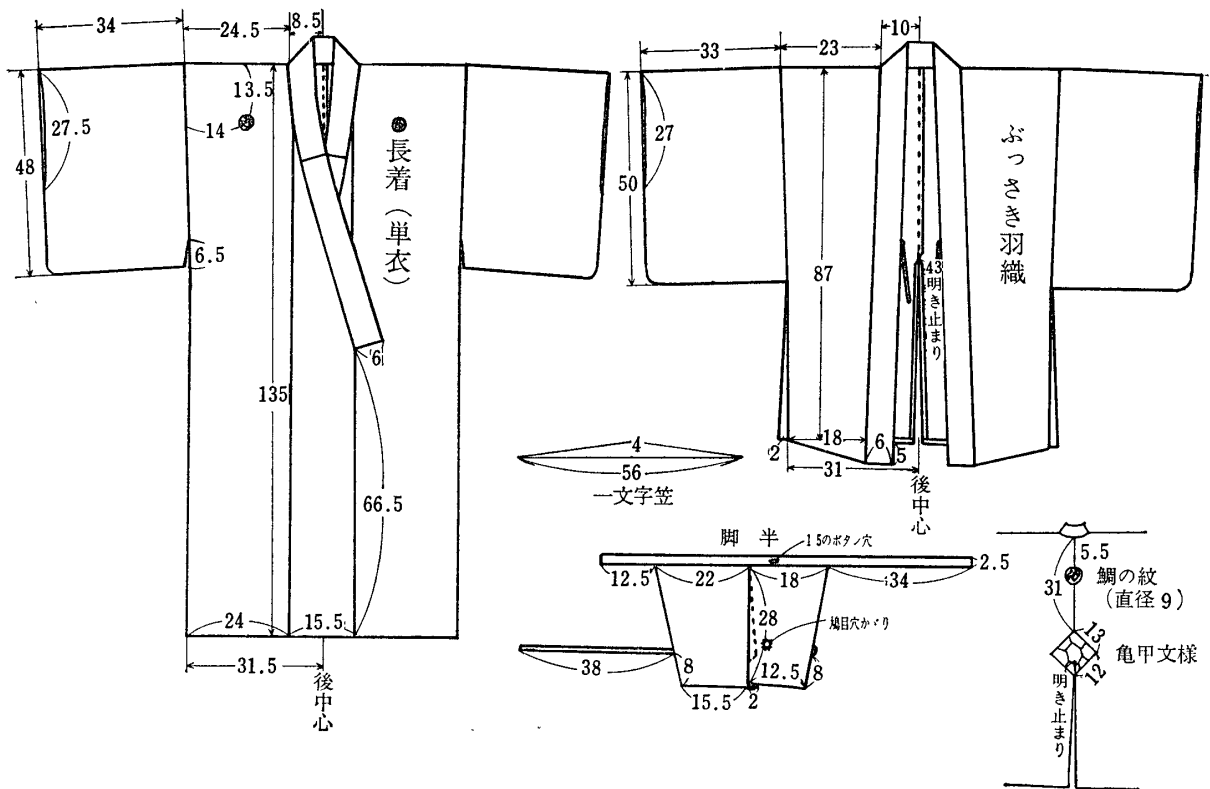


図5 先手（露払い）の衣装

具足櫃（人足）の衣装（図2.6）

具足櫃をかつぐ人足は、明るい紫味がかった青色に白色の細かい柄のある木綿で作られた股引の上に*法被を羽織り、**杉形管笠をかぶり、素足にわらじをはいている。

* 法被

法被は半被から転じたもの、つまり身丈の短い羽織から変化したもので、羽織と異なる点は襟がなく、紐がある。明暦3年1月の江戸の火事に革羽織を初めて着用し、そのことが動機となって、火事にはその家の紋、主名、家名などをつけた羽織を着用したということ、それが法被のはじめといわれている。

最初は羅紗、天鷲絨などの布地を用いたが、その後下級のものが着用するようになったので、もっぱら木綿を使用するようになった。江戸時代の末期には、わずかに武家の奴僕である中間の間で用いられた。本祭礼の人足の法被は、白地に明るい紫味をおびた青色の大きな格子の木綿地で、青に赤色の鯛の図柄の染め抜き紋がある。紋については、町名が肴町なので魚の意とは異なるが、鯛が取り上げられて紋の図柄とされたということである。

** 杉形管笠

杉形管笠については、先手の用いる一文字笠の項で述べたが一文字笠より傾斜が多くなっている。

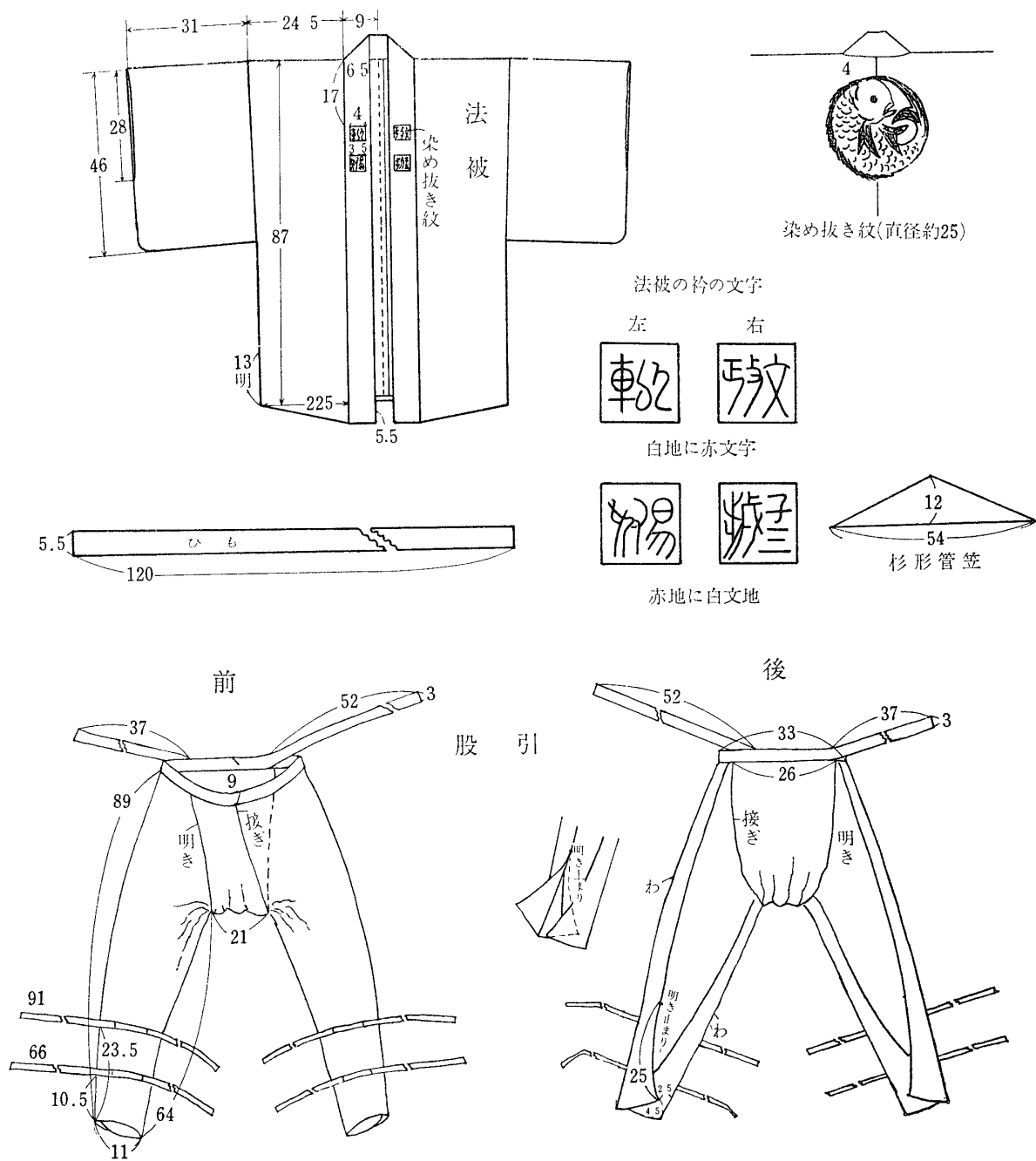


図 6 人足(具足櫛, 箕の箱, 押え長持)の衣装

鉄砲持, 弓持の衣装

鉄砲持, 弓持は長着の上に*^{かるさん}軽袷(図7)をはき, さらに黒木綿のぶっさき羽織をはおり, 頭には杉形管笠をかぶっている. はきものは黒足袋にわらじをはいている.

* 軽 袷 (図7)

軽袷の語源は, スペインの南蛮服カルサオ(Calsao)である. 欧州ではトランクホース(Trunk hose)という, ふくれた半ズボンの下に靴下をはく服装の形式が日本に伝わり, 日本ではふくれた半ズボン状のものと, 脚半状のものが続いて作られたものを軽袷といった. 現在では相撲の呼び出しがこれをはいている. 本祭礼の軽袷は, 暗い茶色の人絹を使用している.

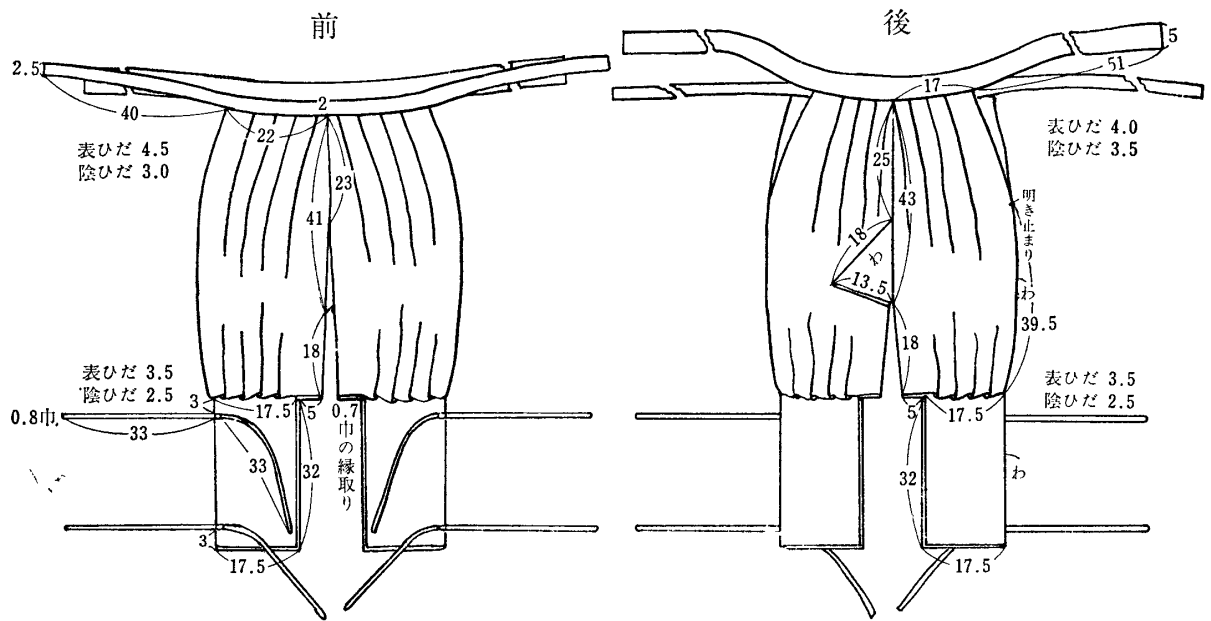


図7 鉄砲持, 弓持, 長刀の軽袷

奴 (先箱, 見通し, 台笠, 立傘, 烏毛) の衣装 (図3, 8)

奴は各役とも白木綿のパンツの上にふんどしをしめ, 暗い青色 (紺色) の麻布で作られた法被を着て, 白色のベンベルグデシンのしごきをしめ (胴に二回位まわして左側で結び, 残りをしめなわのようによって端を右側にさしこむ), 法被と同色の木綿の脚半にわらじをはき, かぶりものは, 先箱と見通しは丸くふくらんだまんじゅう笠をかぶり, その他の役はかぶらない。

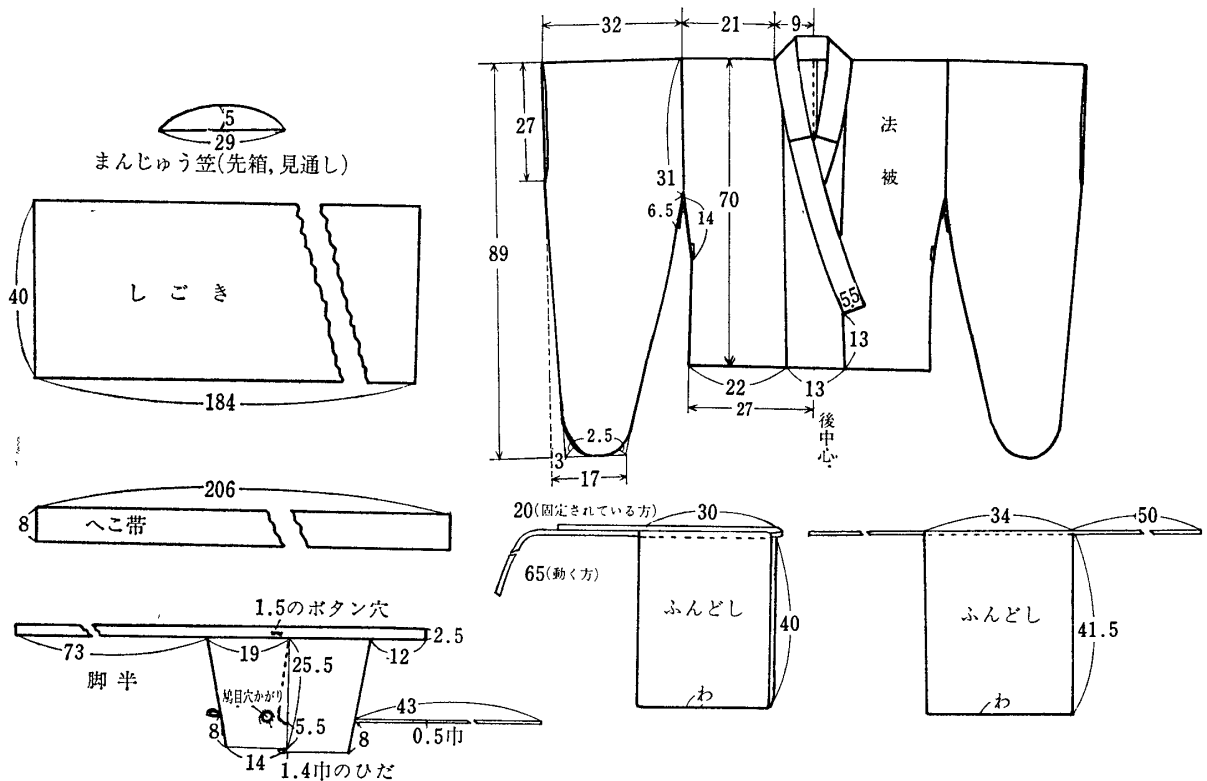


図8 奴 (先箱, 見通し, 台笠, 立傘, 烏毛) の衣装

これは行列の道中の所作の中に、道具を持つ手をこめかみ近くに持って行き道具を振ったり、相手役の素手の人に投げたりする時に、邪魔になるからという理由によるものである。法被の下からは浅黄色や赤色の（赤色は先箱のみ）絹地の越中ふんどしを色あざやかにのぞかせて、庶民的で愛嬌^{きょう}たっぷりな装いをして見る人の目を引いている。奴は昔から日本中の人気者で、そのひょうきんさと威勢のよさが人々に愛されて、奴に扮して踊ることが流行し、元禄の頃より盛んになり、現在に至るまで舞踊や、歌舞伎^{きう}の舞台で活躍している。

長刀の衣装（図7）

長刀を持つ役の衣装は、長着の上に浅黄色と暗い茶の縞木綿の軽衫をはき、黒木綿のぶっさき羽織をはおり、頭には杉形管笠、はきものは黒足袋にわらじをはいている。

陸尺の衣装（図9）

陸尺は暗い青色（紺色）の*看板を着てその裾を端折り、杉形管笠をかぶり、わらじをはいている。

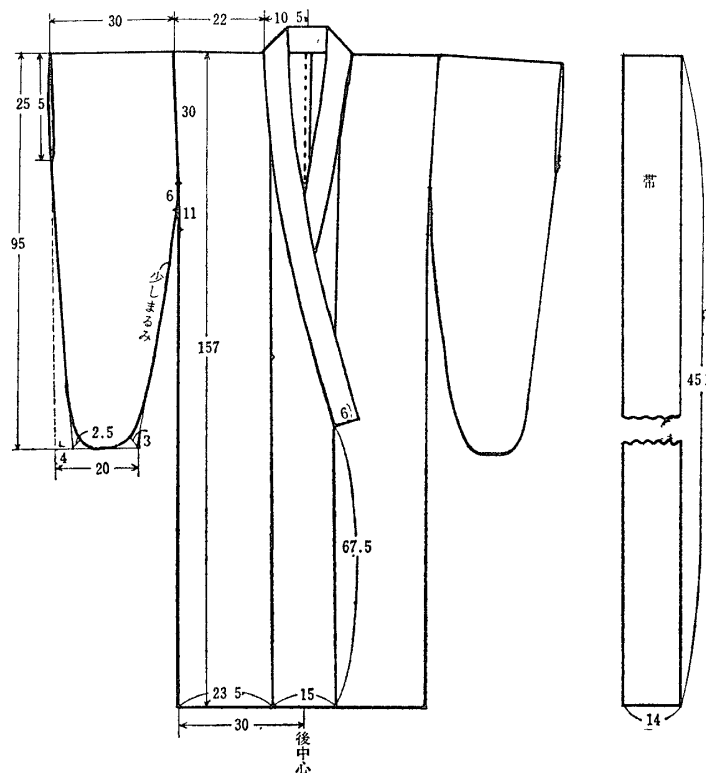


図9 陸尺の衣装(陸尺看板)

* 看 板

主家の紋を大きく染め抜いた着物（奴の法被より着丈の長い点が異なっている）で、袖のたもとに特徴があり、武家の中間、小者（足軽）などが用いた“しきせ”（季節に応じて主家より使用人に与えられる衣服）の一種である。本祭礼の陸尺が用いる看板には紋がないが、これはあとから模倣して作ったものであるからと云うことである。

御近習の衣装

御近習は長着の上に*野袴（図10）をはき、黒色の絹のぶっさき羽織をはおっている。一文字笠をかぶり、白足袋にぞうりをはいている。御近習は大名の御駕籠近くに仕える役柄だけに、大名行列の一行中でも上位の服装をしている。

* 野 袴 (図10)

野袴は武士が旅に出る時の袴で、普通の丈よりやや短かく、裾に黒い縁布をつけるのが特徴である。布地は身分の高い者は縮珍、綴子^{どしす}などで、縁布は普通天鷲絨を用い、身分の低い者は、縞柄の木綿に縁布は同じ木綿を用いたと云うことである。

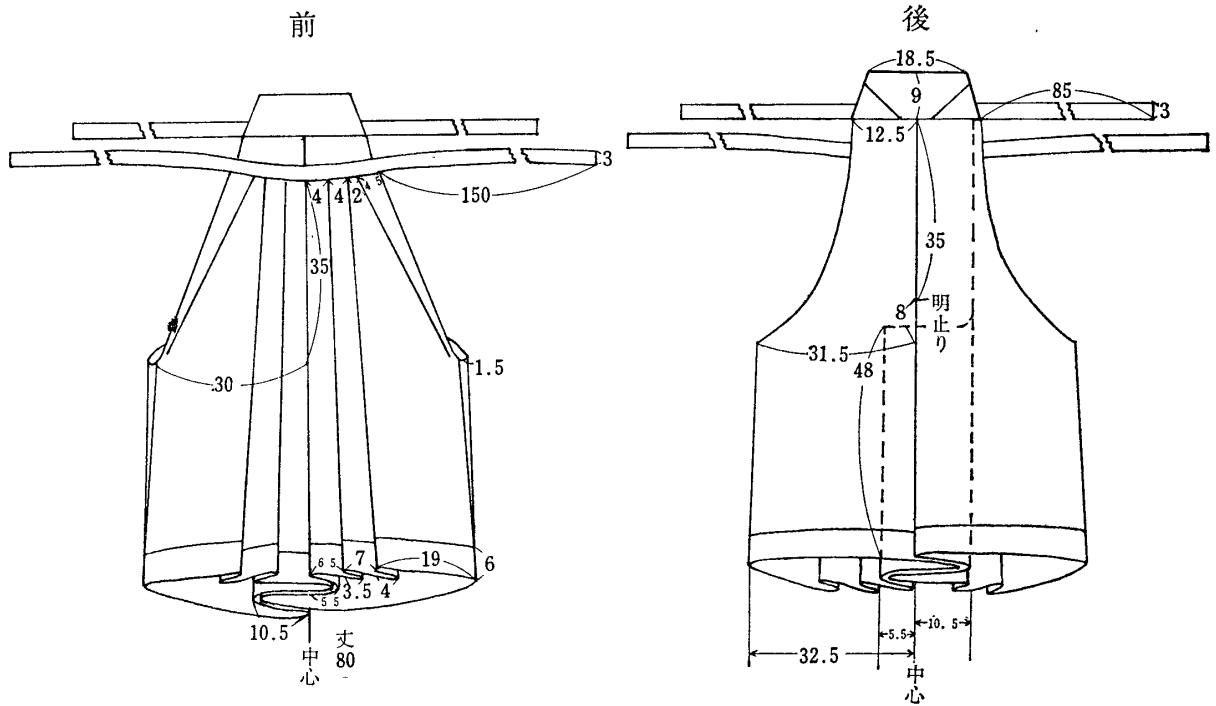


図 10 御 近 習 の 野 袴

4. 小道具について (図11)

西尾の大名行列に用いられている小道具は、古いものは安政5年入手のもの(図11の二本槍)もあるが、その他のものは昭和初期に補修をしたり、江戸時代のものをまねて作りかえたということである。小道具は以前は各家で分担して保管していたが、現在では一カ所にまとめられている。

鉄 砲

鉄砲は天文12年(1543年)に種子島にきたポルトガル人によって、始めて我が国にもたらされたものであることは衆知のことであるが、この祭礼で鉄砲持が持っている鉄砲は、形をまねて木形にしたもので、これを赤の天鷲絨の袋に入れ、袋の口近くに紫味青の組紐がつけられている。

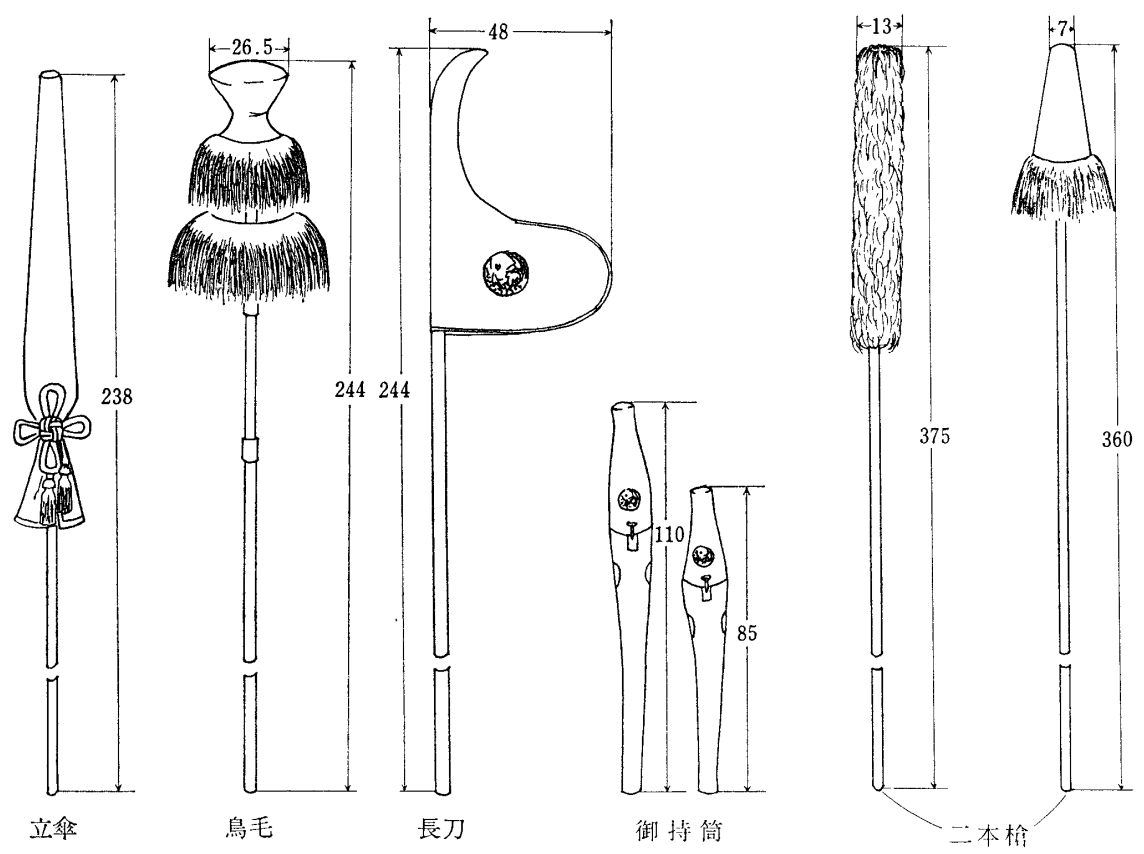
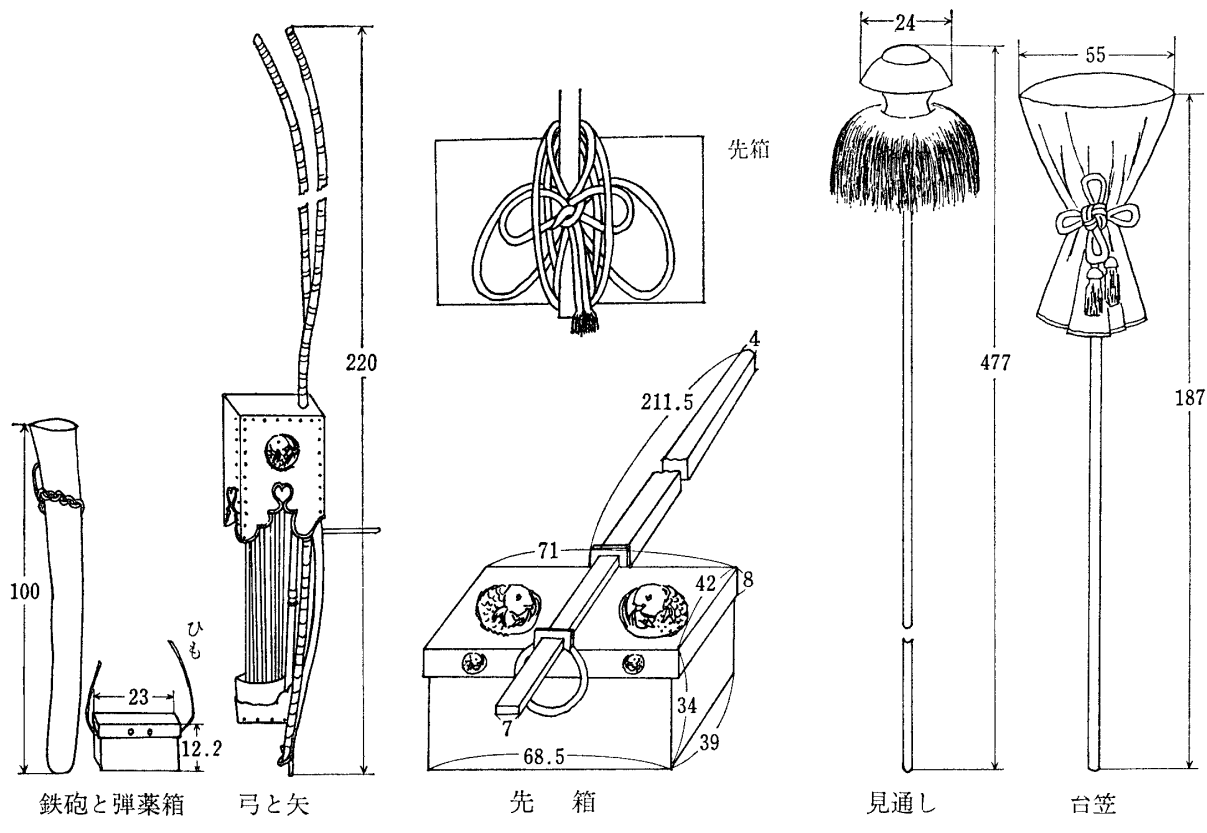


図 11 各役の小道具

弓

弓の起源は遠く中石器時代にさかのぼり、広く世界に分布し、弓と矢で猟器、武器として使用されたということである。本祭礼の弓持のもっている弓矢は、弓が2本、矢が20本で、黒い色の厚紙製で独特の意匠を凝らしたケースに納められている。その黒色のケースには、鯛の図柄の紋が金箔によってあざやかに描かれている。

先箱

先箱とは江戸時代に大名行列の先頭でになり挟み箱のことで、中に正服を入れ、多くは一对である。家の格により覆革に金の定紋を置き、これを金紋先箱といった。また朱紋の家もあり、覆革の地色もそれぞれ定めがある。先箱にかける太い組紐を覆繩といい、代りに革を用いる家もあるが、色は家によりそれぞれ異なったものを用いたということである。本祭礼で現在使用されているものは、昭和10年に名古屋汎太平洋博覧会に出品のため新しく塗りかえられたもので、蓋の表に金色の鯛の図柄の紋があり、図11の組紐は黒の綿糸で直径2.5cmの太さに組んだものである。

見通し

見通しの棒は青貝の象眼で意匠を凝らしたもので、頭頂部にあたる部分には金粉による装飾がなされ、その下に黒や茶色の濃淡の毛が密集してたれ下っている。これは最近のものではなく相当古いもので、毛は馬の毛であろうと関係者はいつている。見通しは小道具の中でも最も長く477cmもあり、行列を作って進む場合に一番遠くまで見通しがきくところから、この名称がつけられたのではないかと思われる。

台笠

台笠は笠に長い棒がつけられていて黒の天鷲絨の袋に入れ、黒い絹の組紐で四つ花形に結んである。この袋には管笠を入れるのが本義で、塗笠を入れるのは略式であるといわれている。現在では笠の代りに円形の板が用いられ、その円形に黒の漆塗の棒がつけられている。

立傘

立傘は長柄の傘のことである。もと馬上の貴人にさしかけたものであるが、のち江戸時代に至り大名たちは専ら駕籠に乗るようになったので立傘が不要になり、この傘を黒の天鷲絨又は羅紗の袋に入れて紫の組紐で中結びをして、供の小者に持たせ、大名行列の具としたということである。本祭礼の立傘は一本の漆塗の棒を黒の天鷲絨の袋に入れ、黒の絹の組紐で四つ花形に結んである。

鳥毛

鳥毛は青貝の象眼の意匠になる木製の棒がつけられ、頭頂部には金粉の装飾がほどこされている。その下に白い毛（馬毛）が2段に別けてつけられ、奴のダイナミックな動きにつれて揺れ動く効果美をねらったものであろう。

長刀

長刀は昔薙刀とも書き、太刀から変化したもので、幅広のそりをもった刀で、長い柄が付けられた武具の一種である。長刀の先端は黒の羅紗で作られた袋で覆われているが、この袋は一種独特の形で、丸い幅広の部分は周囲に暗いオリーブがかった緑色の縁取りがなされている。ほぼ中央には白い羅紗の布地で鯛の図柄の紋がアップリケされて、更に鱗など黒い糸で刺繍をしてある。

御 持 筒

御持筒の筒は黒の漆塗で、鯛の金紋があざやかにえがきだされている。本来は大名の、大小の刀を入れるためのものであるが、重いために現在は入れないとのことである。

二 本 槍

二本槍の柄は2本とも青貝の象眼で、一方は白鳥の羽根で飾られたもので、(二本槍の図左)いま1本の槍は、上部は棕櫚の皮で筒状にかたちづくり、その下に白い毛(馬毛)がたれ下っている。

御 駕 籠 (図4)

駕籠は昔尼眉車、唐庇車、半蔀車など、太上天皇以下四位以上のものが許されて乗ったという^{いたごし}ことで、鎌倉時代には、板輿、綱代輿、張輿、塗輿など、4種類あり、これは肩輿として輶(かつぎ棒)が輿の下についているのが特徴である。江戸時代では、溜塗惣綱代棒黒塗は將軍家で用いられ、その他腰綱代、蔭巻など、また御忍駕籠、留守居駕籠、けんもんかごなどがある。江戸時代のこれらの駕籠は、鎌倉時代の肩輿でなく、かつぎ棒は駕籠の屋根の下に通されたものと、屋根の上に取りつけられたものがある。

本祭礼で使用のものはけんもんかごに似ている。けんもんかごとは献物敷または権門敷とかき、大名の家来で駕籠を持っていない者が主家の用事で他家へ行く場合に、主家から借りた駕籠を用いたということである。幕府への献上物を運ぶために乗ったということであるから“献物駕籠”がなまって“けんもんかご”となったのであろうといわれている。西尾の大名行列で用いられている“けんもんかご”は腰の下部、窓わく、屋根が黒の漆塗で、窓には赤く塗った竹製の簾がかかっている。かごの中央、角には金色の金具が飾られ、前方窓わく上部に、右三つ藤巴の金紋、側面の腰の下部には鯛の金紋がついている。

結 語

大名行列の行なわれる西尾市は愛知県の南にあり、北西に矢作川をひかえ南に平坂という良港がある。昔から「諸往来の廻船、日夜出入りす」とあり、交通開け生産物に富み商業大いに発展し、江戸時代では吉田(吉良町)岡崎(岡崎市)と共に三河の三藩三都会と並び称され繁栄をきそった。そのような地の利を得ているので吉良氏の築城をみ、のち土井氏が西尾の城主を受けつぎ4世84年間におよんだということである。徳川幕府の頃、士農工商の階級制度がきびしかった頃であるにもかかわらず、時の城主土井利意が祭礼の時に限って町民に武士の衣装を用いることを許したことが、西尾の大名行列のはじまりであることは先に述べた。土井利意の人徳と善政は、領民に深く敬愛され、また領主の理解によって大名行列は年々盛大になっていった。一時中止されたことはあったが、西尾市の地の利と町民の熱意によっていまなお盛んとなり例年行なわれている。

祭礼における大名行列は名古屋市やその他の地で行なわれ、大名にゆかりのある武将、道具などを多数出して観衆を楽しませる行列もあるが、西尾市の行列はあくまでも参勤交代の大名行列の旅装束を模倣した地味なものであり、当時をしのばせる行列として貴重な存在といえよう。この度の調査で、大名行列の各役の用いる衣装や道具について写真撮影をし、さらにその各部分を綿密に採寸して図形によって記録し、また被服史によりいささかの比較検討を試みたことは、西尾町誌やその他の関係図書に明らかにされていないことであるだけに、この後の参考資料として役立つことができれば幸である。

終りに本調査をするにあたって御協力下さった西尾市肴町の祭事関係者谷清氏に厚く感謝する。

参考文献および引用文献

- 1) 下中弥三郎：(1949)大百科事典(6) p. 484
- 2) 下中弥三郎：(1950)大百科事典(16) p. 36, p. 448
- 3) 下中弥三郎：(1949)大百科事典(25) p. 378, p. 561
- 4) 後藤守一：(1943)服装史概説 p. 267
- 5) 森末義彰：(1961)風俗辞典 p. 167, p. 177
- 6) 日野西資孝
- 7) 室松岩雄：(1915)近世風俗志 p. 461
- 8) 富山房百科辞典編集部：(1935)国民百科大辞典 p. 515
- 9) 高須岩太郎：(1934)西尾町史下巻 p. 409~411
- 10) 江馬務 日本服飾史要 p. 192
- 11) 藤原覚一：(1943)昭和結び方研究 p. 222
- 12) 下中邦彦：(1955)世界大百科事典(2) p. 256
- 13) 下中邦彦：(1957)世界大百科事典(20) p. 168
- 14) 下中邦彦：(1957)世界大百科事典(29) p. 113